愛の友協会後援会長賞

東京都／40歳／女性／会社員
彩来（さいら） 美雨（みう） 様

✉ 手紙の相手：父

お父さんとお母さんの離婚の話し合いに呼ばれた中学生の私は、お母さんが聞きたくても聞けなかったことを、お父さんにダイレクトに聞きました。仕事と家族のどちらが大切なのかと。お父さんは、仕事や、と即答しましたね。そして、家族が大切だからこそ仕事が大事なんだ、といったその言葉は、家族と仕事を入れ替えても同じことが言えたのに、と思ったものの、私を子ども扱いせず、綺麗事ではない本音を言ってくれたのだと感じていました。

お父さん、今、お元気ですか。

会わなくなってからもう二十年以上が経ってしまったけれど、まだ家族だったころからずっと大事にしているお父さんの言葉があります。私が小学生だったころ、お父さんが会社の名前を考えていて、いくつか案を聞かせてくれた時のことです。

「さっきの名前がよかったと思う、あれ、えっと、なんだっけ。」

と私が言うと、涼しい顔をしてお父さんはこう答えました。

「良いと思っても、記憶に残らなかったらその程度のものということや。」

この言葉を、今もずっと大事にしているのです。

物事を発表するときなどにも意識する言葉だし、何よりも、公私共に人との繋がりにおいて、どの方とも一期一会を大切にして、相手の記憶に残る時間を過ごしたいと考えるようになりました。そのおかげで、とても大切な方とのご縁も深まりました。

ずっと強く記憶に残っているこの言葉の影響力ってすごいよね、なんてゆっくりお話ししたいけれど、きっとそれはもう叶わないと覚悟しています。再婚もしているし、どこに住んでいるかもわからないけれど、また会える日が来るかもしれないから、今どこにいても元気でいてほしいと願っています。

≪ 手紙への想い ≫

「大切な人への想い」その言葉に今でも母は、父を大切に想っていて、私にもそう想っていてほしいのだろうなと思い続けてきたことを思いおこしました。しなくてもいい苦労もありましたが、年々、父のあの時のあの言葉たちの意味が分かるようになってきたと思うことが増え、そのうちの一つを今回手紙で表しました。